

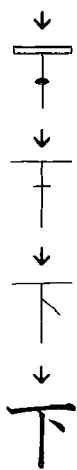
下

二年

画数 3
筆順 一 下 下

カ・ゲ
したしも・もと・さげけるにがる・くだりするにさる・おひりるにろす

成り立ち



さじゆん(もと)になるせんから「下」のほうにせんをひき、「こちらのほうですよ」といういみで「のししをつけた字で、「した」といういみをあらわしたものです。

「した」ということは、「ひくい」ということでもあり、「おひりる」「くだる」「さがる」といういみでもありません。

また、「おろす」「くだす」「さげる」といういみにもつかわれます。

さらに、「おとっている(ト劣)」といういみにもつかわれます。

〔カは漢音、ゲは呉音〕

使い方

- ▽川下(かわしも)のほうへ「下」つて「いくふねがあります。
- ▽坂下(さかした)までいしだんのみちを「下りて」いきました。
- ▽ちよう上で、「下界」をゆつくりとながめたのちに「下山」しました。

熟語例

- ▽下界(したせ)「下の世界」といういみのことばで、たかいところから見下ろしたけしきのことをいいます。
- ▽下山(したざん)「山から下りる」こと。「山を下る」こと。
- ▽下車(したげ)「車から下りる」こと。
- ▽下校(したこう)「学校を下がる」こと。学校からいえにかえることをいいます。
- ▽下品(したへい)「下劣な品性」。品がわるいこと。
- ▽下劣(したれつ)「劣っていること。おおく「品性」についていいません。
- ▽下旬(したげん)「ひとつきを三つにわけて、おわりの十日かんのこと。二十一日ごろ」
- ▽下等(したとう)「下の等級」。「ていどがひくい」といういみにつかわれます。

火

二年

画数 4
筆順 一 少 火
オン カ
クン ひ・ほ

ひ 少 火

成り立ち



「火」がもえているようすをあらわした字で、「ひ」ということばをあらわした字です。

むかしは、「火」のことを「ほ」ともいいました。いまでは「ひ」というのがふつうですが、「おひさま」の「日」とまぎれる。「火影」は、「ほかげ」とよんで、「日影」とまぎれないようにしています。

「火」はもえるものだから、「もえる」「やける」といういみにもつかえます。また、「火のように」はげしい」といういみにもつかわれます。

「火星」という「星」は、とくに「あかい」のでこのなまえをつけられました。「火曜」(カウエイ)というの、「火星の日」といういみのことばです。「曜(年 239)」は日や月や星のことです。

使い方

- ▽「たき火」のあとしまつがわるくて「火事」になりましたが、「大火」にならなくてよかったとおもいました。

熟語例

- ▽たき火(たきび)「かまどやいろりなどで「たき火」も「たき火」ですが、ふつうは、にわでおちばをあつめて「たき」ことをいいます。
- ▽火事(かじ)「火の事件」ということで、いえやはやしなどがやけるでき事のことです。大きな火事を「大火」といい、小さな火事を「小火(ぼや)」といいます。
- ▽火山(かざん)「火の山」ということで、ちかのガスやようがをふきだす山のことです。
- ▽火器(かき)「火を入れるどうぐ」「火鉢」のことですが、いまは、「てつぼう」や「たいほう」など、「火やくてだまをうちだす「兵器」のいみにつかいます。
- ▽火急(かきゅう)「火事は一びようでも急がないといけなないので「ひじように急ぐこと」のいみにつかいます。